

歓迎会

2023.4.13

様々な職場で、歓迎会や送別会はあるかもしれない。学校も、3月には送別会を行い、4月には歓迎会を催すのが当たり前となっている。だが、令和2年3月の送別会からは、夜の部ではなく昼の部が変わったと記憶している。

あの当時は、梁川高校に勤務していた。例年のごとく、送別会の会場は予約されていた。ところが、急遽、開催できる状況ではなくなった。では、どうしたか。昼の部に切り換えた。予約していた会場が、料理や飲み物を運んでくれた。ケータリングである。

以来、3年ほど昼の部が続いた。慣れてはきたが、違和感はいつもある。何だかしっくりこない。おまけに黙食ときた。果たして、やる意味があるのか。だからといって、何も無いのもさびしい。きっと、どの職場も、そのうちいつかは夜の部に戻ることができるかと信じて、昼の部でつないできたのだろう。何とかしのいできたのだろう。

この3月の送別会と4月の歓迎会に関しては、どの学校も考えたのではなかろうか。相談や検討があったはずである。本校も同様であった。昼の部のままでいくのが無難である。夜の部ができないわけではない。問題は、職場の空気感である。多数が夜の部に理解を示したとしても、夜の部に抵抗を示す人がいれば、考えなければならない。その人は、嫌々ながら参加するか欠席するであろう。これが、歓迎会であれば、どうであろう。転入してきた人が、もし、抵抗を示す人だったら。欠席するわけにもいかず、気が進まないまま参加するようになるだろう。

というわけで、本校では、まだ早いということで、夜の部を断念した。ただし、送別会は、令和4年の3月もそうだったが、今回も、体育館でセレモニーを行った。大事なことは、転出する方のお話である。そのための場と時間を確保した。

送別会以上に歓迎会は悩んだ。送別会から歓迎会までは、1週間ほどしか離れてはいない。だが、年度が改まると、気分も変わってくる。3月よりは、4月のほうが夜の部の賛成派は増えたが、前述の理由から昼の部とした。

開催方法の検討段階で、夜の部で、ぜひ若手の先生に教えたいたことがたくさんあるという話が出た。私も同意見である。これも、教師文化の伝承である。教えはするが、その後どうするかは、若手の面々が判断すればよい。乾杯のご発声、エールを切る、三本締め、一本締めと一丁締めの違い、万歳三唱など、知ってほしいことが山ほどある。

先輩方が生き生きと若手をつかまえて教え込むのは、夏ぐらいからだろうか。今から、若手の困惑した顔が目に見えかぶ。